

日立駅

自由通路および橋上駅舎

「茨城県・日立市」

取材協力：妹島和世建築設計事務所 片桐広祥氏
日立市シテイプロモーション推進課
JRR日立駅

日立市の玄関口であるJR常磐線の日立駅。

ここから海は、目と鼻の先の位置にある。

改札につながる自由通路は、

線路の東西を結んでブリッジのように架かる。

その端にある展望イベントホールとカフェからは、

ガラス越しに雄大な太平洋を望むことができる。

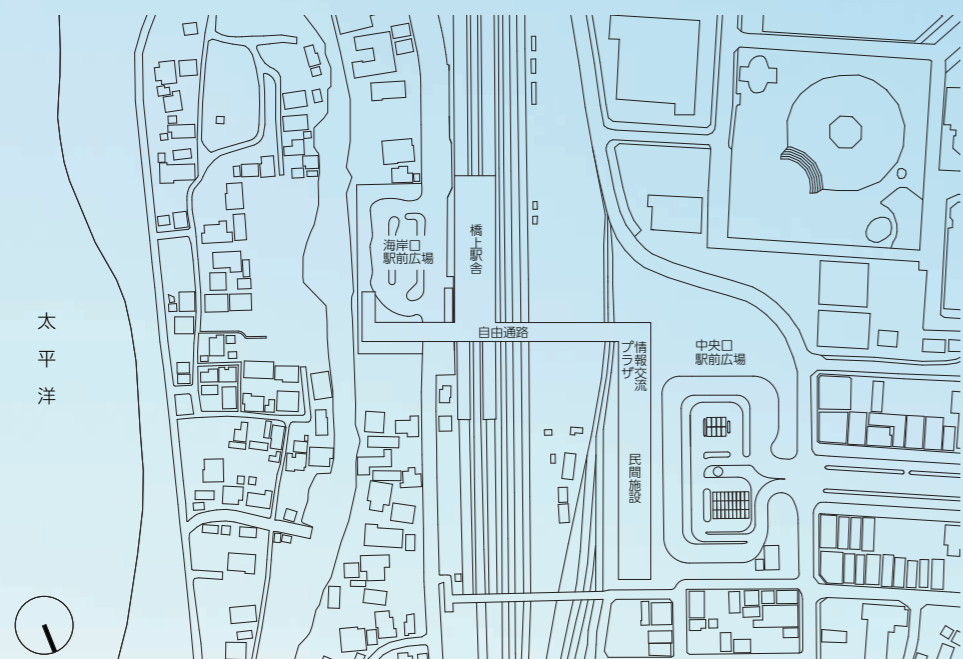
駅はそれ自体が人気のスポットとなり、

地元の人や観光客で賑う。

デザイン監修を担当した建築家の妹島和世氏は、

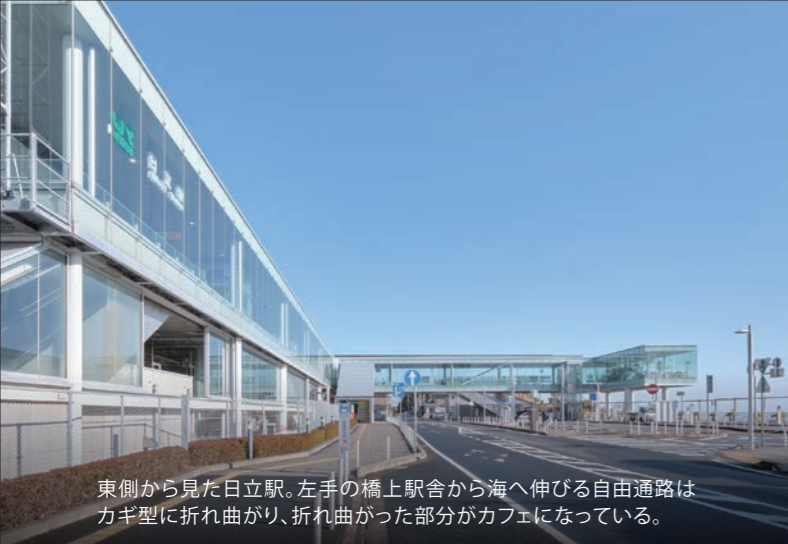
日立らしい風景を最大限に味わえる場所として、

駅舎をデザインしたという。



日立駅の建て替え計画においては、橋上駅舎を中心に線路を挟む海側と山側の地域をつなぐことが求められた。現在、ガラス張りの軽やかな自由通路が東西に伸び、日立市の街をひとつに結んでいる。写真は、北側から見た日立駅。(図：妹島和世建築設計事務所)

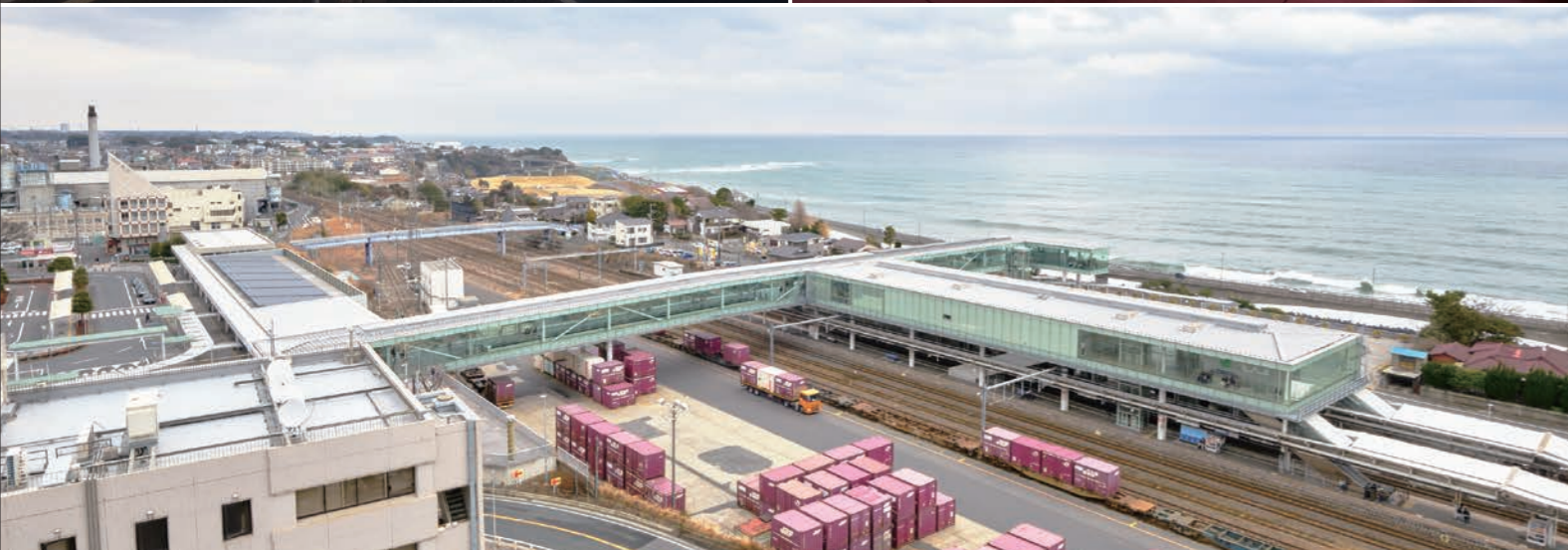




東側から見た日立駅。左手の橋上駅舎から海へ伸びる自由通路はカギ型に折れ曲がり、折れ曲がった部分がカフェになっている。



水平線から昇る朝日を180度のパノラマで望む。展望イベントホールで見ることが出来る絶景の一つ。



西側から見た日立駅。橋上駅舎から、東西に全長約139メートルの自由通路が伸びている。



自由通路の東の突き当たりにつけられた、太平洋を一望できる展望イベントホール。人気の観光スポットとなっている。ベンチのデザインも妹島氏の手によるものだ。

水平線が見える駅

茨城県北部に位置し、海と山に挟まれて南北に細長く伸びる街、日立市。その玄関口が日立駅だ。JR常磐線で日立駅に着き、ホームからエスカレーターで橋上駅舎に上がると、そこはガラス張りの透明なコンコースだ。水平線まで広がる太平洋が人々を出迎える。

改札を抜けると、その先は東西に伸びる自由通路で、東が海側、西が山側の出口となっている。通路の端から端まで、両側壁面はガラス張りになっていて歩きながら日立の街が一望できる。

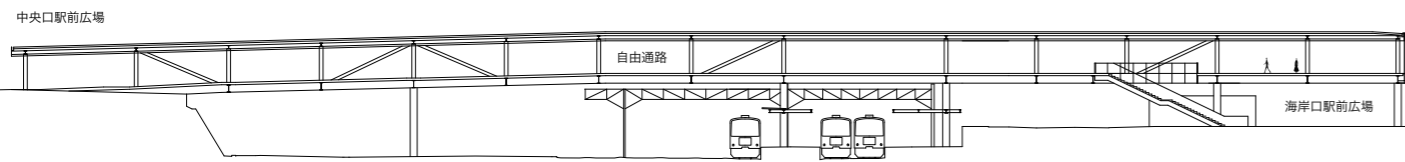
海側に向かって進んで行くと、海岸口の駅前広場に下りるエスカレーターがある。広場に下りずにそのまま進むと、行き止まったところが展望イベントホールだ。ここからは180度の視界で、弧を描く水平線を望むことができる。刻々と表情を変える海の景色は飽きることなく眺めていられる。

展望イベントホールから通路はカギ形に折れ曲がり、その先は

カフェになっている。学生、ビジネスパーソン、親子連れ、お年寄りなどさまざまな人々が、カフェや展望イベントホールで思い思いの時間を過ごしている。

振り返って西側へと進めば、今度はガラス越しに山を背景にした駅周辺の街並みが目に入る。海と山に挟まれた街を実感できる風景だ。通路を抜けると中央口駅前広場に出る。バス乗り場に面して自由通路とひとつながりになったガラス張りの建物の中に、観光案内所や店舗などさまざまなサービス施設が連なっている。

日立駅の建て替え計画がスタートしたのは2006年。その計画には、駅舎だけではなく駅周辺を調和の取れたデザインで整備することが盛り込まれていた。線路上空の橋上駅舎、線路を挟んだ東側、西側の駅前広場とそれをつなぐ自由通路、西側の駅舎跡を利用して建てる情報交流プラザなどをどう魅力的に関係づけるか、という問いだ。



この計画にデザイン監修者として関わったのが妹島和世氏だ。すみだ北斎美術館やルーヴル美術館ランス別館(フランス)*、金沢21世紀美術館*を設計した妹島氏は、建築界のノーベル賞とも呼ばれるプリツカー賞を受賞するなど、世界的に活躍する建築家である。実は日立市の出身で、高校生の時には、通学のために毎日この駅を利用していったという。妹島氏はそんな地元の人間ならではの視点を、この駅舎の設計に込めたという。

「日立の街では至る所で海が目に入ります。しかし昔の駅舎からは、潮の香りはするものの海は見えませんでした。駅を建て替えるにあたって、海が見えることが日立らしさを表現することだろうとまず考えました。そして豊かな海と山の景観を邪魔しないよう、街を水平的につなぐような建物にした」と思いました」

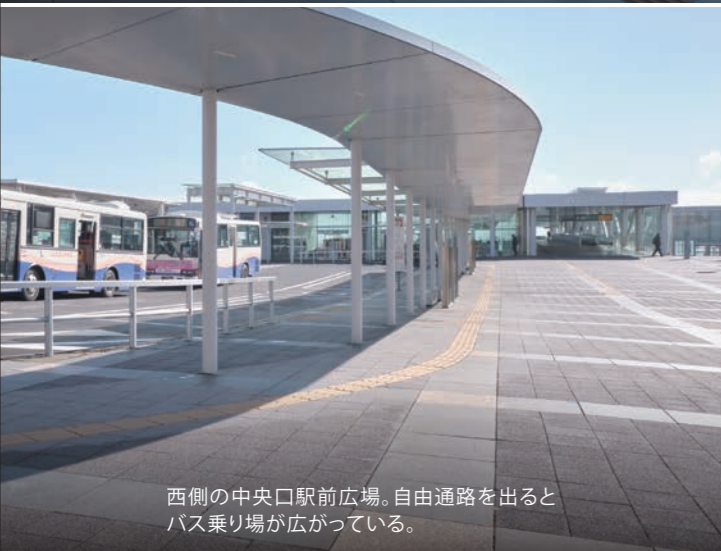
* 西沢立衛氏との共同設計



耐震化など、駅舎として通常の建築を超える安全性、耐久性を実現している。



橋上駅舎のコンコースから見たカフェ。憩う人々の姿が、海を背景に宙に浮いているように見える。



西側の中央口駅前広場。自由通路を出るとバス乗り場が広がっている。



西側の情報交流プラザ。自由通路と連続したガラス張りのデザインとなっている。



西側から見た自由通路。アルミの天井と光沢のあるコンクリート床に、周囲の風景が柔らかく映り込んでいる。



ホームからエスカレーターで上ると、床から天井までガラススクリーンのコンコースとなっている。広大な太平洋が迎えてくれる。

り立たせる柱はできるだけ細く、梁は見えないように隠し、コインロッカーも高さを抑えて見通しを確保した。
そして天井面と床面には、それぞれ反射性の高い材料が採用されている。ガラススクリーンが採り入れた周辺の風景が、天井と床に柔らかく映り込み、通路を明るく演出し人々を招き入れている。
一方で日立駅には、駅舎として通常の建築をはるかに超える構造上の安全性、耐久性が求められた。妹島和世設計事務所とJRのチームは幾度となく検証を重ね、設計コンセプトにおいて妥協することなく、高度なレベルの安全性をクリアした。
2011年、オープン前の検査をしている最中に発生した東日本大地震にも、建物はほぼ無傷だった。
日立駅の自由通路と駅舎の完成によって海側と山側に分かれていた日立市の街はひとつになり、さまざまな施設へのアクセスが円滑化されたことで賑わいが生まれた。それに加えて日立駅は、その魅力に

風景を引き立てる設計の工夫

2013年、日立駅周辺整備は完了し、日立駅は鉄道分野の国際的なデザイン賞であるブルネル賞やグッドデザイン賞などを受賞した。国内で駅の名建築といえ、代表的なものが東京駅の赤レンガ駅舎だ。建物自体に存在感があり、中に入るとドーム天井のデザインが見る者の目を釘付けにする。一方、日立駅は周辺の風景こそが、印象をつくり上げている。利用する人々にとって、建築物はあたかも絵画を引き立てる額縁のようだ。そこが駅の建築としてユニークだ。

建築物を風景に溶け込ませるために妹島氏は、細部にわたって工夫を積み重ねている。

たとえば、床から天井まで届くガラススクリーンの取り付け方である。ガラスは上下二辺支持に加えて、中間に点支持用に金物を併用しているが、歩行者から隠れた位置で支持することで最大限の眺望を実現している。また構造を成



ガラス清掃のためメンテナンス・デッキは、内側からの視線を遮らないよう通路の床より低い高さに設置されている。



パンチングメタルの天井。小さな穴を通して換気を行い駅舎と自由通路の快適な環境を保っている。

よって人々を引き寄せ、駅そのものが交流の空間となっている。今日も人々は展望イベントホールで、カフェで、自由通路で語り合う。
日立市で育った子どもたちは故郷の風景として、日立駅からの眺めをいつまでも覚えていられるだろう。